

不登校支援の実際と予防について

2013.5.27

東京家政大学・大学院 教授 相馬 誠一 氏

1 不登校とは

(1) 不登校観の変遷

- ・不登校観にはこれまで様々な説があったが、現在は「生き方の問題」として捉えられている。
- ・分離不安説（1950 年代後半～）分離不安型→神経症的な中核説（1960～1970）葛藤型→学校病理説（1970～1980）無気力型→社会病理説（1990～2000）脱学校型→生き方の問題（2003～）ひきこもり

(2) 不登校の定義と現状

- ・30日を超えていないからと言って、29日は不登校ではないのか。学校としては、欠席29日であったとしても、考えていかなければならない。
- ・病的、経済的な理由であっても、広い意味で考えていかなければならない。

(3) 不登校児童生徒の推移（人数）

- ・小・中学校合わせて、一時12万～14万人にまでなる。現在11万7千人。
- ・不登校児童生徒数の推移をみると、2001年をピークに減ってきている。しかし、子どもの数自体も減ってきているため、単純に不登校が減ってきているというわけではない。（数のマジック）

(4) 不登校児童生徒の推移

- ・兵庫県 24年度 5,017人
- ・出現率で考えると、不登校は増えてきている。
- ・全国と兵庫県
全国と比較すると小・中学校ともに下がってきている。（23年度中学校は、少し高め）
- ・23年度の出現率
全国 小学校 0.33% 中学校 2.64%
兵庫県 小学校 0.25% 中学校 2.67%

(5) 学年別不登校児童生徒数

- ・問題は、中3の不登校が多いこと（39,225人）。受験の時期にこれほど多い。
- ・小・中学校の不登校数を比較すると、中学校は小学校の3倍の数になる。中一ギャップか。

- ・小学校からずっと不登校状態が続いている慢性型の不登校は、非常に良くない状態である。慢性型になると、社会性が身に付かない。
- ・中3で4万人近い子が不登校になっていることを重く受け止める必要がある。

(6) 不登校となったきっかけ

- ・学校生活に起因するもの…34.7%
 - 「いじめ」、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が多い。数字としては20%近いが、実感としては8割近い。友だち作りまで学校で教えていかねばならない背景がある。
- ・家庭生活に起因するもの…20.7%
 - 貧困にかかわるものが多い
- ・本人の問題に起因するもの…78.9%
- ・高等学校では、学校生活に起因するものとして「友人関係をめぐる問題」が多い。8.8% きめ細やかな配慮が必要。
- ・小学校から継続して不登校傾向の子もいるが、高校生になってから不登校になる子もいる。高校の先生にも不登校の学習を。高校も含めて一緒に考えていくことが大切。

(7) 不登校の基本的な考え方

- ・不登校は病気ではない。「学校に行かない、行けない」状態像。
- ・不登校を経験してもその後の生活は充実しており、心理的に安定しているならば大きな教育問題や社会問題にする必要はない。

2 不登校児支援の現状

(1) 校内外相談等の現状

- ・35.2%の子は、校外機関が何らかの形で関わっているので大丈夫。
- ・31.4%の子は校内外で相談を受けていない。この点が問題である。
- ・不登校担当教員は、自校の生徒がどこに関わっているのか、関わっていない子がいないかを把握する必要がある。

(2) 不登校問題への施策

- ・登校拒否（不登校）問題について一児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して（1996）
 - 「登校拒否（不登校）はどの子にも起こり得るものである」
 - 「登校刺激を与えてはいけない」⇒誤解。不登校は放っておいてはいけない。

(3) 今後の不登校への対応の在り方について

- ・LD、ADHD、児童虐待等との関連

- ・「ひきこもり」問題との関連
- ・不登校問題は「心の問題」のみならず「進路の問題」
- ・教育支援センター（適応指導教室）の整備指針策定
- ・訪問型支援の取組

（４）社会的ひきこもり

- ・定義について「６ヶ月以上自宅にひきこもって社会的参加しない状態が・・・」
- ・ニートとの違い→ニートは就学・就労がしたくてもできない。
- ・ひきこもりは６ヶ月以上で自ら。精神病ではない。
- ・内閣府発表（2010. 7月）によると、15歳から39歳のひきこもりは70万人近い。

（69万6000人）

ひきこもり 23万6000人

準ひきこもり（自分の趣味に関する用事は外出する）46万人

ひきこもりと準ひきこもりを合わせると、約70万人になる。

- ・ひきこもり事例に共通する特徴

不登校＝ひきこもりではない。ただし、不登校からの長期化は多い。

共通する特徴

- 挫折体験・・・受験等の失敗
- 内向的
- 外出せず、昼夜逆転した生活
- 強迫症状、対人恐怖
- 家庭内暴力、自殺未遂

- ・ひきこもりを英語で言うと＝HIKIKOMORI

英語で表せる言葉がない。

ニューヨークや韓国では、予算をかけて個々に対応している。

- ・人数では日本が一番多いが、取組はおざなり。この課題に対する意識が低すぎる。
- ・兵庫県では、神出学園がよく取り組んでいる。全国でトップ。
- ・人生の花の時にひきこもらなければならないのは悲しいこと。

3 不登校に関する実態調査

- ・どうして、不登校問題は生き方の問題なのか。
- ・不登校に関する実態調査

不登校を経験した25,992人の二十歳の人にダイレクトメール（調査A→アンケート調査B→面接調査C）による。

不登校に対する後悔 502人（36.0%）

(1) 不登校児の進学先

- 30.9%は全日制高校に進学。しかし32.7%は進学していない。
- サポート校は私立が多い。経済的に苦しい家庭は辞めていく。
- 公立の学校をつくっていかねばならない。
- 高校の先生も、やはり不登校に取り組むことが必要。

(2) 進学先の卒業の有無

- 進学して、卒業・修了しているのは、60.5%。中退は多い。最後の砦として、卒業させることが大切。
- 中退後のひきこもりもある。中退後、就職しようと思っても、中退者はなかなか雇ってもらえない。

(3) 現在の通学・就労状況

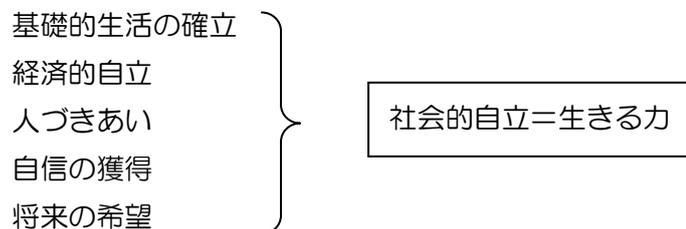
- 進学先として短大 1.9%、大学 6.7%
- ハンディのある子ほど大学まで手厚く見てもらえる方がよいが、厳しい現状がある。
- 37.9% 就業せず。
- 22.8% 進学せず就学しない。

(4) 現在の状態と課題

- 就労できていない現状があるが、働くことはとても大切なことである。
- 働けば、人付き合いができるようになり、自信が獲得される。そして、将来に希望を見いだせる。反対に考えると、就職できなければ獲得できないこと。

4 不登校をした子どもたちの課題

- 現在、子どもにできていることは何か。将来つけていきたい力は何か。
適応指導教室でも、これらを考えて指導してほしい。



5 海外でのモデル

(1) アメリカ合衆国におけるASCAナショナルモデル

- 350人～400人の学校にスクールカウンセラーがいる。

- 個々の学業、キャリア、発達、社会性のカリキュラムに即して行い、すべての子どもが学業で成功するように支援する。(おちこぼれ防止法案)
- 大変な学校にしっかり人と予算を配置する。
- ASCAのナショナルスタンダード州の基準に関連付けながら行っている。
- 頑張っているところに予算をつけよう。

(2) フィンランドの教育

- 学力(読解力、数学、科学的リテラシー) 世界一の秘密
 学び方を学ぶ⇒キャリア教育、自分の適正を知る。
 平均得点が高いのではなく、得点が低い生徒が少ない⇒学校間の学力格差がない。
 得点が低い生徒を出さないように努力している。
 ※日本は格差がある。(経済力、学力)
 義務教育がすべて無料。
 ※義務教育9年間で次の後期中等教育に進むのに十分でなければ10年勉強できる。(任意の留年)10年生の比率は2~3%。その3分の1が障害のある生徒である。できるようになるまで学ぶ。
 大学は授業料無料、学生は生活費が支給される。海外の渡航費まで出る。
- 基礎教育法(ナショナル・コア・カリキュラム)
- 子どもの身体的、心理的、社会発達に対する個別のサポート
- 多様な問題(不登校、いじめ、暴力等)の予防と対処もしっかりしている。
- 通学手段と学校給食の提供。
- GDP(国内総生産)に対する教育支出の割合約6.0% (OECD:2008)
 ※日本4.9%
- 義務教育段階での年間予算:7216ドル、平均:6845ドル、日本:7187ドル
- 日本は教育でしか生き残れない。どこに予算をつけなければならないのか、しっかり考える必要がある。

6 学校での取組と予防

- 学校は不登校を出さない努力を。(校内連携)
- 学校でできることは学校です。責任者は校長
 早期対応はどうか。例:不登校の場合、2日間休んだらどうするか決めておく。
- 学力保障はどうか。
 不登校児童は20人以上いる場合は校内適応指導教室設置。教員配置。
- 不登校児童・ひきこもりへの訪問支援の強化
 「1年の間に誰もこなかった。忘れられてしまったのか」とならないように。
- 高校の不登校生徒への支援・・・夜間や休日にこそ相談窓口を設置すべきではないか。

- 地域機関やNPOと連携して「学校づくり」「体験活動」の場づくり。
- 小中高連携。

(1) 学校内の連携

- 学校の連携＝コラボレーション＝協働
 - 学力不足
 - 学力補償では同学年の教材で⇒プライドを傷つけない工夫を
 - 心理的な問題
 - 発達・性格の問題
 - 身体的問題

(2) 不登校対応教員と教職員の役割

- 学力の補償
 - 基礎基本の徹底、同学年教材を使用
- 社会性の育成
 - 何があってもプライドを傷つけない
- 不登校の予防活動

(3) SC と教員の役割

- 各学校で SC、不登校担当教員、教職員、それぞれがすべきことを分けて考える。
- 情報共有と情報交換
- 明日の地域の担い手を育てる
- 社会保障費の減額と税収の増税

(4) 具体的な方策

- 「不登校児童生徒を出さないためのチェックリスト」について
 - これを土台にして各校で工夫して作成する。
 - 市で共通使用したところ、不登校が減った取組もある。
 - 教員の本分は子どもとの会話。事務的な仕事はできるだけ少なくする。
- 連続する「月3日の欠席」がポイント！学校全体でどのような対応をしたらよいか
 - 欠席状態が3日続いたらどうするか相談しておく。 病気でも家庭訪問をする。
- 個人支援シート
 - フィンランドの個人支援プログラムを参考に作成

7 各地域での取り組み

- NPOと連携

- 予算を考えて積極的に取る。今のための100万か未来のための100万か
⇒未来へ投資する
- 不登校児へ体験活動が大切
- 特別な施設紹介
 - 福岡市立こども総合センターえがお館・・・福祉に関する相談から子ども、警察関係、ここに行けば解決する。機関連携ができるメリットもある。
 - 都立桐ヶ丘高校・・・相談員が7名在籍、指名で相談できる。
 - 京都洛風中学校・・・木製の用具、隣が相談センター

- ★不登校問題は
 - 生き方の問題
 - 明日の私たちの問題

午後の演習

不登校の子どもたちの自尊感情

東京都版自尊感情尺度・・・普通の学校でも使用できる

チェックシートで確認

不登校の子は28～30点・・・自己評価が低い⇒「かけがえのない人だよ！」と言葉や行動で伝えていく努力を！

不登校の子どもは自尊感情が非常に低い傾向にある。⇒自己評価が低い

描画を取り入れたカウンセリング

描画を褒められることで自尊感情が高くなる。ただし、褒められて嫌な気持ちになることもあるので、へたな褒め方をしないこと。心を込めて褒める。

個人描画

- 線のみで描かれた形を見て、何に見えるか見立てをする。
- サインペン等で付け足しをする。
- グループ内で見せ合い、褒め合う。

協働描写

- グループの構成員それぞれが、順番に、サインペンや極太マジック等で画用紙や模造紙に、誘発線を1本ずつ引く。

- 線がつくった形が何に見えるかグループで見立てをする。
- クレパス等で色をつけて絵を完成させる。
- 完成までの間はたくさん話をし、交流する。
- 名前と日付を入れる。
- 他のグループの作品を見て、褒め合う。

スクイブル（スクイグル）

なぐり書きをして隣同士で褒め合う＝子どもたちとの関係作り

できたらほめる。欠点よりも長所を伸ばす。やり取りする中で心の交流をする。

そのため、何を書いたらどんなことがわかるというわけではない。

⇒分析的に見るものではない。

分散会の記録を見て気になったこと

尺度をいくつか導入するのは有効である＝その子の課題が具体的にどこにあるのか良くわかり、取組（援助）に生かせる。援助の方法は、より具体的に考えること。

市販のQUTテストもあるが、自尊感情尺度の有効活用を。

連携という言葉だけが優先してはだめ。汗を流して具体的に動いてこそ。

組織として機能する、連携する＝管理職のリーダーシップ